

## 中学校における総合的な学習の可能性と諸問題

—学校行事にリンクさせた総合的な学習の実践を通して—

中野 真志  
(愛知教育大学 生活科教育講座)

秋吉 知久  
(安城市立篠目中学校)

### Possibilities and Problems of Integrated Studies in Junior High School

Shinji NAKANO (Department of Life Environment Studies Education, Aichi University of Education)  
Tomohisa AKIYOSHI (Sasame Junior High School, Anjo)

**要約** 平成12年度から新学習指導要領の移行期に入り、総合的な学習の本格的な取り組みが始まった。総合的な学習の趣旨についての理解も深まり、その特質を生かした授業づくりやカリキュラムづくりを積極的に推進している学校も多い。しかし、その一方で、総合的な学習の趣旨を歪めて、簡単に処理しようという思惑も少なからず見受けられる。学校による格差、教師による格差は確かに存在する。しかし、来年度からすべての学校レベル、すべての学校において実施しなければならないという現状認識に立つならば、現時点でのその可能性と問題点を明らかにすることが、今後の理論と実践の発展にとって意義あることと考えた。本小論は、昨年度に引き続き、秋吉教諭（安城市立篠目中学校）との共同研究の成果に基づいている。特に、秋吉教諭が直接担当した中学校1年生の総合的な学習の実践について述べた後、中学校における総合的な学習の可能性および実践する上での諸問題について論じた。

**キーワード**：総合的な学習，可能性，諸問題

#### 1 はじめに

篠目中学校では、「生きる力」を「①生活および社会に関わる問題を総合的にとらえる力，②自分の将来を構想する中で、直面する問題や自己の課題に対する自己決定力，③生涯にわたって学ぼうとする力」と定義した。そして、「けやき学習」と名付けられた総合的な学習が、このような生きる力を育む有効な方法であると考え、正規のカリキュラムの中に総合的な学習を位置づけた。時間的な措置としては、第1・2・(5)週の土曜日の第3校時と第2・4週の木曜日の第6校時に実施し、また必要に応じて、土曜日の第2校時に位置づけてある学校裁量の時間にも実施した。結果として、各学年35時間～40時間の取り組みとなった。

各学年がそれぞれ、1年生「私・仲間・そして自然」、2年生「自分の生き方を見つけよう」、3年生「Better (ベター) —より良い自分を作ろう—」というテーマを設定し、自然教室 (1年生)、職場体験学習 (2年生)、修学旅行 (3年生) という学校行事にリンクさせながら、総合的な学習の実践を展開したのである。

本小論では、特に、共同研究者である秋吉教諭が直接担当した1年生の総合的な学習の実践について、2名の抽出児の変容を追いながら述べる。その後、中学校における総合的な学習の可能性および実践する上での諸問題について論じる。もちろん、本小論が、平成10年度、11年度における実践研究の成果および平成12年

度の2年生や3年生における総合的な学習の実践も考慮した上での論考であることは言うまでもない。

#### II 中学1年生における総合的な学習の全体構想

##### 1. 生徒の実態と目指す生徒像

篠目中学校の生徒の傾向として、興味・関心は強く、さまざまな情報を積極的に収集することができる反面、物ごとを追及する持続性に欠ける面と、追及に深まりや広がりが見られない面がある。1年生についても同様の傾向が見られる。その原因を分析してみると、①一つの事象に対し、さまざまな角度から分析する力に欠けている、②知識および思考や判断を裏付けるための経験が乏しい、③問題意識をもつことができず、自ら問題を解決する力に欠けている、ということが言える。もちろん、これは生徒側だけの問題ではなく、教師側も勉強不足なため、生徒たちの思考に広がりや深まりを与える指導ができないのが現状である。

しかし、一人ひとりをとらえてみると、自分の考えをしっかりとつ生徒も見られ、生活日記などには自分の思っていることを表記することができる。

総合的な学習を始めるにあたって、小学校で行ってきた総合的な学習についてのアンケート調査を行った。各小学校ごとに取材活動や体験活動を通じた学習がなされていた。そんな中で次のような感想があった。「最後の戦争のことを調べたときは『戦争』というテ

ーマが重かったから緊張したけど、だんだんやっていると、いろいろなことが分かってきたから楽しかったです。731部隊の話は本当に悲しかったです。」「6年生の時は、本とにらめっこで『どこへ行こう』とかなくて、活動も地味であり面白いものとは言えませんでした。』

このような生徒の実態およびアンケート調査の結果に基づいて、知らないことを知る満足感だけでなく、自分の生き方に迫ることのできるような、そして、やはり追究することの楽しさを生徒たちが体得することを意図した平成12年度の総合的な学習の構想を考えました。

全体目標は昨年度と同様、「自分のよい所を見つけ、磨き、伸し、他人のよさも理解して、失敗を恐れず挑戦する篠中生」である。この全体目標を受けて、目指す生徒像を「①自ら問題を見つけ、学び、考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決し、たくましく生きる生徒、②自分の将来を構想し、夢や希望をもってよりよく生きる生徒、③他人を思いやり、他人と協調したり他人に貢献しようとする生徒」とした。この具体的な部分目標も昨年度とほぼ同じである。この目標を達成するために、次のような方法と手だてを考えた。

## 2. 目標を達成するための方法および手だて

### 【方法】

①生徒が意欲的に問題を見つけ主体的に問題解決を行うことができるように、生徒の生活に関わるような題材および生徒の興味・関心をひくような今日的な問題などの身近な題材を取りあげる。また、問題意識の連続性のある学習構想をたてた。

②意欲的な学習を進め、地域の中における自らの生き方の追究を行うことができよう、積極的に地域に関わり合いをもち、体験的活動や奉仕的な活動を行う。

③自分の思いを自由に表現し、相手の気持ちを受け止めながら活動することができるように、他者との関わり合いを通じた表現活動の場を多く設定した。

### 【手だて】

①自然教室の生活を通して「自分を見つめる」「自然に生きる」というテーマを設定する。自然教室の中の1日の体験的な学習の場を設定し、それを出発点とした総合的な学習を展開する。問題解決的な学習を、「気づき」「考え」「検証する」「見つめ直す」の4つの段階としてとらえ、特に「考える」⇔「試してみる(体験)」の活動を重視する。

②地域との関わりを深めるために、積極的にゲストティーチャーを招へいし、生徒との関わりをもたせる。地域でのボランティア活動、体験学習の場を多く設定する。

③学習グループ作りの際に、構成的エンカウンターを導入することで、生徒たちに協力することの大切さを

学ばせ、効果的な学習を促進させる。学習のまとめの発表会を通し、積極的に仲間や地域に対し情報発信を行わせる。

## III 総合的な学習の単元構想—中学1年生—

総合的な学習を進めるにあたって、自然教室を出発点とした展開を試みた。例えば、『環境問題』について学習させたいという教師の願いはあっても、それは生徒自身から生まれた課題や問題意識ではない。そこから、生徒自らが考えた課題は生じないと考えたからだ。

自然教室という普段体験できない自然とのふれ合いの中で、また自然の中での生活を通して生徒たちに総合的な学習のきっかけをつかませたいと思った。そして、自分たちの生活との比較の中から問題意識が生ずることを願った。最終的には、今住んでいる「ふるさと安城」についてさまざまな角度から考えさせたいと思い、以下のような構想を立てた。

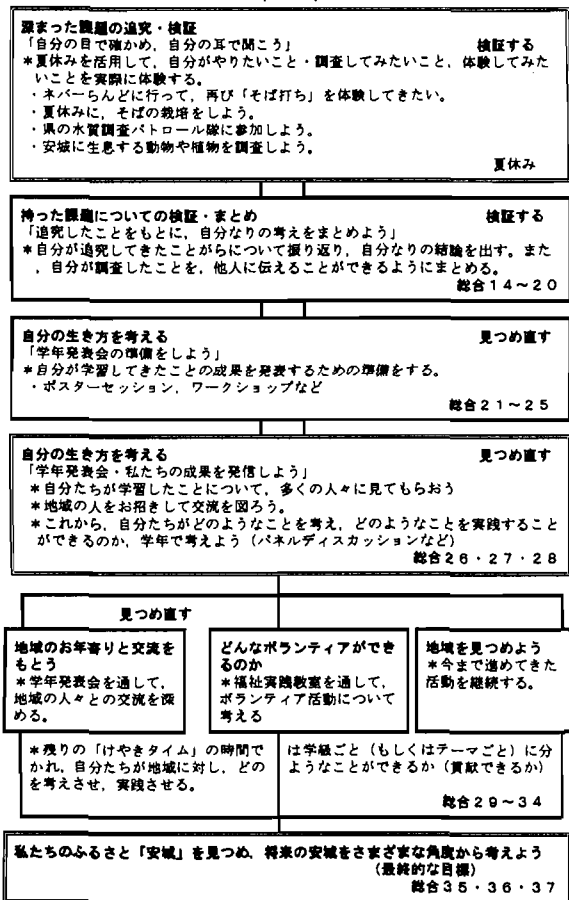
### 資料1

平成12年度 1年生「けやき学習」構想図

- 基本的な考え方・・・どのような考え方を示すのか
 

①自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる学習であること。
②体験活動を通して、生徒の心が動かされ、学びがいをもつことができる学習であること。
③学習を通して、自分をしっかり見つけ、自分の生き方をじっくりと考えることのできるきっかけを与える学習であること。
④地域の人材の協力を得ることで、地域と深い関わりをもつことができる学習であること。
⑤地域社会を見つめ、地域に貢献できるように、自分たちから情報発信ができるような学習であるようにする。
- 「総合的な学習～1年生編～」構想表
 

*テーマ「わたし・仲間・そして自然」(自然教室をスタートにした学習)				
<b>ガイダンス1</b> 「総合学習ってなんだろう」 *中学校の総合学習の時間では、どんなことを勉強するのか。 *どのように学習を進めていくのか。	総合1			
<b>ガイダンス2</b> 「どんな学習をしていくのか」(アンケート) *小学校で行ってきた総合学習の調査 *今、どんなことに興味や関心をもっているのか	総合2			
<b>自然教室</b> 「自然教室を通して、何かつかんでみよう」(体験学習) *自然教室の中に「体験学習」を組み入れ、生徒たちの課題設定の手がかりとする *いくつかの講座を設定し、生徒の興味・関心をもとに選択させる 5月15日～5月19日	気づき			
<table border="1"> <tr> <td> <b>環境</b>                              *根羽のおいしい水 (水質調査)                         </td> <td> <b>根羽の伝統・社会</b>                              *そば作りを体験しよう                              *根羽の糠子を取材しよう                         </td> <td> <b>自然</b>                              *根羽の動物を調べよう                              *根羽の植物を観察しよう                              *野草を食べてみよう                              *根羽の自然を紹介しよう                         </td> </tr> </table>	<b>環境</b> *根羽のおいしい水 (水質調査)	<b>根羽の伝統・社会</b> *そば作りを体験しよう *根羽の糠子を取材しよう	<b>自然</b> *根羽の動物を調べよう *根羽の植物を観察しよう *野草を食べてみよう *根羽の自然を紹介しよう	
<b>環境</b> *根羽のおいしい水 (水質調査)	<b>根羽の伝統・社会</b> *そば作りを体験しよう *根羽の糠子を取材しよう	<b>自然</b> *根羽の動物を調べよう *根羽の植物を観察しよう *野草を食べてみよう *根羽の自然を紹介しよう		
<b>課題をもつ</b> 「君はどんな内容で学習を進めるのか」 *自然教室、自分の今までの生活を通して、どんなことを追究したいのか。 *学習の計画、方法を考えよう。	総合3・4			
<b>課題追究をする</b> 「課題追究のための調査・体験をしよう」 (実施した内容) *自然教室で調べたこと、体験したことをまとめる。 *校内、校外で調査活動を推進する。(割目川の調査、学区の動物しらべ) *取材活動の交渉をしよう。(歴史博物館・安城市役所) *各教室でテーマに関わる授業を受ける	総合5～10 考える			
<b>中間まとめ</b> 「追究の中間報告書を作成しよう」 *現在までの追究の中間報告書ができるようなまとめをする。	総合11～13			



資料1におけるガイダンス2の授業の中で、生徒達に今年の「けやき学習」でどんなことについて取り組みたいか、アンケート調査を行った。調査結果は資料2の通りである

資料2

<p>アンケート結果（抜粋）                  ※今年の「けやき学習」で取り組みたいことは何ですか</p> <p>①自然環境について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな種類の「きのこ」について</li> <li>・自然にあるものを使って、何か作りたい</li> <li>・環境問題について</li> <li>・動物とか生き物について調べてみたい</li> </ul> <p>②国際交流について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・外国の人と交流したい</li> <li>・インターネットを活用して、Eメール交換したい</li> <li>・世界各国の言葉について調べたい</li> <li>・外国の食文化について調べたい</li> </ul> <p>③社会福祉について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・障害を持った人たちと交流したい</li> <li>・自分たちができるボランティアとは何か</li> </ul> <p>④その他</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・UFOの存在について調べたい</li> <li>・戦争について調べたい（広島・長崎の原爆）</li> <li>・ホームページを作成して、全国の学校と交流したい</li> </ul> <p>※自然教室「けやき学習」で行いたいことは何ですか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・川に入って生き物を捕まえて調べたい</li> <li>・近くにある植物を使って、何かを作りたい</li> <li>・自然の中でのんびり絵を描きたい</li> <li>・山と安城ではどのような違いがあるのか</li> </ul>
--

- ・竹や木を使って工作をしたい
- ・野鳥の観察
- ・星の観察をしたい
- ・川の水の水質を調べたい
- ・自然をどうやって守っていくのかを考えたい
- ・食べることでできる植物について調べたい
- ・茶臼の探検をしたい

自然教室では、意欲的に体験活動を行いたいという意見が多かった。普段の生活の中ではできないことに挑戦したいという生徒の思いだと考えられる。S子は授業後の感想で「作ることができ、人に伝えることができる」といいな」と書いていた。今回の実践において2名の抽出生徒を設定し、その生徒の変容とグループ全体の変化を追うことにした。

資料3

- 【抽出生徒S子】
- ・比較的高い能力をもっており、物事を論理的に考えることができる。また、知識も豊富である反面その裏付けが資料に頼りがちである。自分の経験を通しての知識に乏しい。今回の学習を通して、できるだけ多くの経験をさせ、多面的に物事をとらえさせたい。また、グループ学習のリーダーとして活躍させたい。
- 【抽出生徒N子】
- ・総合的な学習に対して意欲的に取り組もうとする気持ちはあるが、その気持ちを前面に出すことがなかなかできない。小学校の時は多くの体験活動や取材活動を経験している。その持ち味を生かすとともに、多くの人々に対し情報発信ができるような生徒に育ててほしいと願う。

資料2で明らかのように、生徒達の興味や関心はさまざまな方面にわたっていたが、一年担当の教師全員で話し合った結果、資料4のような七つの講座を開設することにした。また、「できるだけ自分の興味・関心もてるテーマで学習ができる。同じテーマをもったもの同士が円滑に学習を進めることができる。学び合うことで、お互いの能力を高めることができる。（構成的エンカウンター）」ということをねらいとして、学級の枠を取り外した。

資料4

- 自然教室「けやきタイム」の開設講座
- ①「山にはどんな動物がいるのだろうか」  
 ＊茶臼に生息する動物たちに接し、どんな動物が生息しているのかを知る。そのような動物が生活できる環境を安城と比較する
  - ②「植物について」  
 ＊茶臼と安城の植物の違いについて、気候や環境面から考える
  - ③「木材加工にチャレンジしよう」  
 ＊茶臼山に植林されている「すぎ」を中心に、茶臼山で見られる木材の特性について学び、実際に生活用品を作成する
  - ④「茶臼の自然を紹介しよう」  
 ＊デジタルカメラで撮影した映像をコンピューターに取

り込んで、ホームページを作成しよう

⑤「矢作川の水源を探る」

\*私たちの生活の水源は「矢作川」、その矢作川の水源を探検し、その「水」について考えるとともに環境問題を考える

⑥「探求! 根羽村の全てを探る」

\*根羽村に住んでいる人にインタビューをしながら、根羽村の様子を知る。また、根羽の特産、名所について見学・体験学習を行う

⑦「野草を食す」

\*食べることでできる野草を採集し、実際に食べる

#### IV 中学1年生における総合的な学習の実践

総合的な学習の構想においては、先述した問題解決の四つの段階、すなわち「気づき」「考える」「検証する」「見つめ直す」という展開を考え、実践した。以下、この四段階に即して実践の概要を述べるが、その前に、各段階についてもう少し詳細に説明する。

「気づき」とは、様々な活動を通して、自らが感じたこと、疑問に思ったこと、調べてみたいと感じたことをもとに、自らが課題をもつ段階である。例えば、自然教室での「そば作り」の体験である。「考える」とは、自分が疑問に思ったこと、調べてみたいことについて、多様な角度から考え分析をする段階である。文献調査、インターネット、聞き取り調査などである。

「検証する」とは、自分が調べたことに対し、実際に活動を通し確かめる段階である。ボランティア活動、清掃活動などの実践活動が中心となる。「見つめ直す」とは、今まで学習したことを通して、地域に情報発信したり、自分の生活に生かしたりする段階である。発表会やホームページの作成などが考えられる。

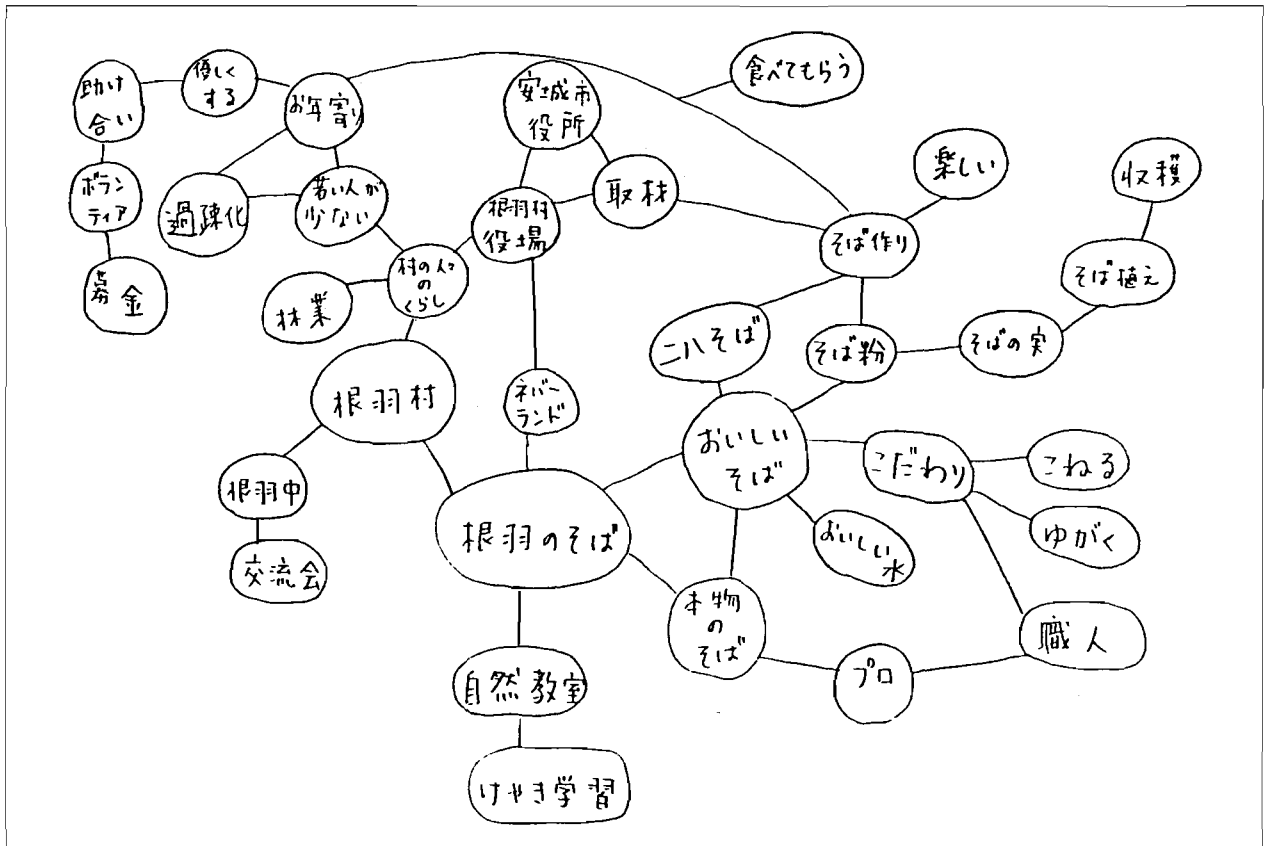
#### 1. 「気づき」の活動～自然教室体験活動～

S子とN子は「人と人との関わり合い」というテーマを設定した。根羽村において「そば作り」が行われていることを知ったS子たちは、自然教室でぜひそばうち体験学習を行いたいという願いをもち、それを行うことにした。

当日はそば職人の助言と指導を受けながらグループごとに活動をした。「初めてそばを作ってみたけれど、食べることができるものができてよかった。やっぱり自分で作ったそばは、おいしいものだと思う」という感想を述べた。そばうち体験を行った後も、生徒たちは職人さんに対して取材活動を行った。

体験活動を終えた後、N子を中心とした4名は、根羽の村役場を取材することにした。N子は自分の住んでいる地域と根羽村の違いについて興味をもっていた。取材活動を通して根羽村の現状や過疎化のこと、高齢化社会の対策について熱心に聞いていた。

資料5



## 2. 「考える」の活動～課題づくり～

自然教室から帰ってきて、それぞれの講座で体験活動を土台にした課題作りが始まった。「水」をテーマにしたグループは、矢作川の水質調査を追究課題にした。根羽を源とした矢作川にこだわりをもったのである。根羽中も同様の調査を行っているため、協力して上流と中流の水質調査の違いについての研究を進めた。

そばうち体験を行ったS子は、「おいしいそばを自分たちでも作れないであろうか」というこだわりをもち始めた。ただ漠然と「そばうちがやりたい」という考えをもっている生徒もいた。

活動主義に陥ってしまい、追究の本質を見失ってしまう恐れもあると感じたため、生徒たちの課題作りの土台になるための手だてとして、資料5に示すような「そば」を出発にしたイメージマップ作りを行った。イメージマップ作りを通して、生徒たちの思考は広がりを見せた。

「おいしいそばを作りたい」と言っていたS子はこの活動から単にそばを作るだけでなく、職人のこだわり・材料などへのこだわりについても追究したいと考えた。

S子は、「究極のそば作りへの挑戦」というテーマをもち、安城市内のそば屋へ取材に行くことを目標にした。さらには、自分たちで育てたそばを使ってそばうちをしたい、自分たちの作ったそばを、近所のお年寄りに食べてもらいたいとも考えるようになった。

一方、イメージマップを作成する中で、N子たちは「根羽村にはお年寄りが多く、将来高齢化がさらに進むと心配だ」ということを考えた。実際に根羽中学校との交流会で、1年生が15人しかいないことに驚いていた。「福祉」「ボランティア」という方向に追究を進めるようになっていった。根羽村での取材活動から芽生えたこだわりをもち続けていったのである。

## 3. 「検証する」の活動

そば屋の取材を通してS子たちは、「おいしいそば作りの秘訣」をつかんだ。取材活動を進めていくうちに、取材だけでは物足りず、何としても自分たちでそばうちをしたいという思いをもち始めた。



学区の中にそばうち経験の豊富な人がいたため、ゲ

ストティーチャーとしてお迎えをし、生徒たちに技術指導をしてもらうことにした。5か月ぶりにそばうちを行ったため、なかなか手際よく作業を行うことができなかった。講師の先生が資料を用意してくれたが、うまく活用することができなかった。また、取材を通して学んだことも生かしきれていなかった。できあがったそばは、水分が多く団子ようになってしまい、食べられるものではなかった。

S子は学習の振り返りの中で、「水分の量を調節することの難しさ」ということを感じ取っていた。そのことは、そば屋で取材活動を通して学んだことでもあった。

けやき学習カード	氏名	S子
今日の学習を振り返ろう		
5か月ぶりにそばを作りました。師匠のKさんの教えに従って作ってみたのですが、失敗してしまいました。とても悔しいです。あんな団子のようなそばは誰も食べてくれないと思います。失敗した最大の原因は「水の量」です。そば粉500gに対して水の量は270ccだったのに、それ以上の水を加えてしまったような気がします。ほんの少しの違いでもできあがりが違うなんて思ってもみませんでした。サガミの人が言っていたように水の調節が大切なことが分かりました。		

講師の先生もS子たちの失敗について一緒になって考えてくださった。失敗を次に生かすためにどのようなことを考えなければならないのか、というアドバイスをしてくださった。この反省を生かし、次のチャレンジでは完璧なそばを完成させることができた。

ボランティア活動に興味を示したN子たちは、福祉センターを取材することにした。N子たちの追究課題は「自分たちにできるボランティアにはどんなものがあるか」であった。

福祉センターの取材を通して、福祉ボランティアについて考えるだけでなく、実際に行動したいという気持ちが生えていった。自分たちの調査活動をもとに作成した「篠目ボランティアマップ」や「古乾電池回収」という具体的な行動を起こしていった。特に古乾電池回収では、地域のスーパーなどに協力を求め、回収ボックスを設置させてもらい協力を得た。

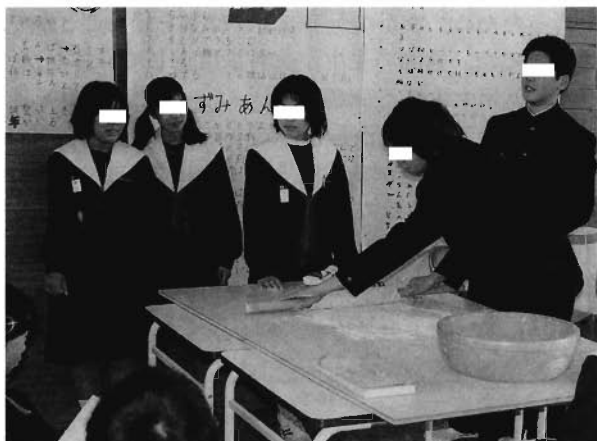
また、新聞作りを通して、学年全体に福祉の心を育てようと呼びかけていった。このN子たちの活動がきっかけとなり、立案会が企画した「福祉実践教室」が各学級で実践されるようになり、学年全体に広がっていった。

## 4. 「見つめ直す」の活動～学年発表会～

今までの追究活動の成果を発表する場として、学年発表会を設定した。それぞれの講座ごとにポスターセッション形式で発表した。

S子たちのグループは、さらなる練習を重ねて本番を迎えることにした。なぜ自分たちがそば作りを目指

してきたのか、どんな苦勞をしてきたのか、そば作りの秘訣とこだわりについて発表をした。



N子たちのグループは、作成した篠目ボランティアマップをもとに、今の福祉事業の問題点などを発表していた。また、自分たちで作った募金箱を持ちながら、参観に来た人たちに対し募金活動を行った。

学年発表会終了後、各講座で学習の振り返りを行った。そば作りを行った班は「こだわりをもち続けることの大切さ」「ひとつの失敗から多くのものが生まれてくる。何に対してもあきらめずにチャレンジしたい」など、活動を振り返りながら意見を出し合った。

N子たちのボランティア班は、当日の募金活動で二千円ほど集めたことを喜んだ。

「最初は簡単に集まると思っていたけど、やってみると大変なことがわかった。発表会の時に『ぜひ続けてくださいね』と声を掛けられた時はうれしかった」と発表会を振り返っていた。

## 5. 実践後の生徒の様子

N子たちのボランティア活動の輪は広がりを見せている。「アフリカの難民を助けるために、私たちができる援助をしたい」と、立案会のメンバーの一人が企画書を書いて持ってきた。募金を集めていたN子は、英語教諭に頼みドイツ平和村へ手紙を出す準備をしているところである。そば作りにこだわりを見せていたS子は、月に1回、必ず家庭でそば作りを行っている

と笑顔で話をしてくれた。

この学習を通して、本当に私たちの目指す「生きる力」が育ったのかどうかはわからない。しかし、着実に自分たちで何とかしようという気持ちで行動できるようになったのは確かなことである。

## V 総合的な学習の可能性と諸問題

### 1. 総合的な学習の可能性

(1)生徒たちの動機付けにとって有効であり、学ぶことの意味を実感できる。

どのような学習素材をもって来るかによって、生徒たちの学習意欲の高まりは違ってくる。篠目中学校の1年生の場合、根羽村での「自然教室」を契機とした総合的な学習を行った。例えば、「そば」作りなど、現地での活動が充実したものになった場合、そこから学習に深まりが見られた。

2年生では「職場体験学習」にリンクさせた総合的な学習を展開した。活動そのものは生徒たちにとって意味あるものになっていたと思われるが、そこから総合的な学習をどのように展開し発展させいくのかを十分に考慮していなかったため、イベント的になり、総合的な学習が深まらなかったようである。

総合的な学習で学んだ知識や経験を生徒たちの日常生活にそのまま生かそうとすると、なかなか難しい面があり、また、教師が仕組んだ事柄が、果たして生徒たちにとって意味のあること、価値のあることかどうか、教師側と生徒側との間にズレが生じる場合もある。

だが、総合的な学習を通して「生き方を追求させる」ということを考えた場合、学習を通していく中で、「人との関わり合い」の中から多くのことがらを学ぶことができるであろう。今回の中学1年生の実践の場合、ゲストティーチャーとの学び合いから、「粘り強く学ぶことの大切さ」というものを肌身をもって感じることができた。また、ボランティア活動を行った生徒たちは、学習を通す中でボランティア活動を何も考えずに実践するのではなく、「なぜ、このようなボランティア活動が必要なのか」という部分まで掘り下げた考えることができた。

以上の点から考えてみても、総合的な学習を行うことで「学ぶことの意味を実感できる」ということが言えるのではないかと。

(2)教科との関連、あるいは教科同士の関連を見直す契機となる。

3年生の実践（平成14年度実施予定）「共生」（仮のテーマ）での「修学旅行」にリンクさせた総合的な学習では、さまざまな教科とのクロスカリキュラムが可能となる。教科との関連、あるいは教科同士の関連を見直す契機となるであろう。ただ、平成14年度より新学習指導要領が実施され、各教科の時間数が大幅に削

減されることになる。その中で、教科の時間を活用してのクロスカリキュラムが可能になるのかは、現状ではわからない。

しかし、中学校3年間の集大成としての総合的な学習を展開しようと考えた場合、できるだけ生徒たちの思考が広がるような学習構想を立てる必要があると考える。

### (3)学級、学校の壁、教師間の壁を越える。

今回の1年生の実践では、生徒のもつ「興味・関心・意欲」に重点を置いたため、学級を解体し、学年で総合的な学習を実施した。この結果、生徒たちの追究はある程度深まったものになったと思われる。ただ、篠目中学校のような中規模校の場合、このようなシステムをとると物理的に困難な面が生じてくる。例えば、学年全職員がそれぞれの講座をもっていたため、校外で学習を行う生徒が出てきた場合、その他の生徒の扱いをどのようにするのかについて常に問題となることが多かった。

そのような問題点がクリアされれば、学級の壁を越えた総合的な学習を展開することは、学習を進めるうえで効果的な手だての1つと考えることができる。

### (4)家庭や地域と連携することによって、家庭の教育力、地域の教育力の回復につながる。

総合的な学習を展開するうえで、地域や家庭の協力というものは必要となる。今回の1年生の実践においても、できるだけ地域の人々に協力を依頼し、外部講師として指導をしていただいた。生徒たちにとっても新鮮みのあるものになった。また、地域の方も学校側に大きな期待を抱いているし、意欲的に学校へ働きかけをしようとしている。平成13年度の2年生は、「よりよい郷土篠目（安城）を作ろう！～郷土からの発信と郷土への提言～」というテーマで総合的な学習を進めている。自分たちの住む篠目をこの機会にしっかりと見つめ、将来自分たちが中心となって支える郷土のために、今何ができるのであろうか、そのために、どんなことを考えなければならないのか、ということを経験の中心としている。中学生の活動を地域へ広げ、よりよい地域社会作りに貢献できる人として育てたいという願いと、地域社会を盛り上げるパワーの源になってほしいという願いがある。このことが家庭の教育力・地域の教育力の回復につながるのではないのか。

## 2. 総合的な学習の実践における諸問題

### (1)教師の指導や支援のあり方

中学校では教科担任制であるため、多くの教師たちは、どうしても教科の枠組みを越えた柔軟な発想や授業展開に慣れていないように思われる。そのため、適切な指導や支援をできずに戸惑う場合が多いと言えるだろう。「はじめに子どもありき」とは、何も指導しない、支援しないことを意味するのではないし、また、

子どもの興味や関心に振り回されることでもない。絶えず子ども理解を深め、適切な指導や支援のあり方を探究する教師の自覚と態度を示すものとする。

また、総合的な学習は、生徒の興味や関心を大切にすればするほど、学びが深まれば深まるほど、一人の教師でフォローすることは困難である。中学校では特に、教科担任制の枠を越えなければ、総合的な学習を適切に実践することは難しい。複数の教科の教師が協力すれば、自然に総合化が進むことは明らかであろう。さらに、上述したように、家庭や地域の協力が不可欠である。

### (2)総合的な学習の教育課程

中学校では時間割を柔軟に組み替えて総合的な学習を実践することが難しい。というのは、上述したように教科担任制であり、通常、異なる学年にまたがって教えているからである。年間を通して毎週必ず1～2時間を確保して総合的な学習を展開するケースが多い。その時、校外での活動は、時間的な制約を受けることが多く、充実した活動を実施できないケースが多い。今回の実践でも、長期の休業や、祝日・学校休業日を活用し、取材活動や体験学習を行った生徒が多かったという。このような授業日以外の生徒の学びをどのようにとらえ、指導し評価していくのかも今後の課題である。

短期集中型の授業を展開した場合、集中して学習を展開することができるので、じっくりと腰をすえて学習に臨めることができる。しかし、容易に課題をもつことができない生徒たちにとっては、短期間の中で課題をつかむことができるかどうか心配である。そのような状態で、体験・取材活動をこなせるかどうか問題となる。また、教科の時間割編制が問題点としてあげられる。総合的な学習の時間を振り替えるための時間割編制の仕方によって、週1時間しかない教科の場合や異なる学年を担当している場合など、教科の時間割に関してさまざまな問題が生じることは明らかである。

### (3)人材バンクの充実、地域、保護者への協力

地域へ学習が広がることで、教室外での活動が増える。そのため、どのように地域の人材を活用していくのが課題として残った。これは、先述の可能性と表裏一体であり、この課題を克服することによって、総合的な学習がより適切に実行されるのである。「今、学校でどのような学習がなされているのか」ということを常に伝え、保護者や地域の人々の協力を得ることで、学習の幅は広がってくる。

今日、学校教育に要求されていることの一つは、その開放性であり、また児童・生徒の実践的活動を通じた社会参加である。言い換えれば、社会から隔離された教育ではなく、社会に開かれた学校教育である。

今後ますます、教師が地域素材をどのように活用していくのか、地域素材の活用能力が問われるであろう。

篠目中学校では、教師達が今年の夏休みに地域素材を知るために、総合的な学習で生徒たちの学習がなされるであろうと思われる所に行き、学習会を行い、少しでも知識を得ようとした。このような活動についても、積極的に言うべきことがらであり、教師の協同が要求される。

#### (4) 3年間を見通した総合的な学習の構想

篠目中学校における平成12年度の実践で考えるならば、1年生から2年生、3年生のつながりが希薄であったように思われる。もう一度、全教員で討議しながら、「身につけさせたい価値観・力」を精選し、それがどのように関わってくるのか、そして、各学年での発達段階を考慮し、学校の全カリキュラムの中でそれらを各学年にどのように位置づけていくのかを考える必要がある。中学校の3年間を見通したカリキュラム構想が必要不可欠である。総合的な学習のカリキュラム・デザインを含めた学校独自のカリキュラム開発は、短期間で完成するものではない。また、より質の高いカリキュラムを目指して発展させ続けなければならない。今後ますます、カリキュラム開発を担う教師の資質の向上と能力の発達が要請されているのである。それは、教育的な要請だけではなく、社会にとっての強い要請でもある。

## VI おわりに

これまで、総合的な学習の理論と実践に関する様々な言説が数多く語られてきた。その中には例えば、理論面では、各教科の学習を基礎・基本とし、総合的な学習を応用・発展とする見解、あるいは教科学習を知識中心、総合的な学習を経験中心とする機能分化的な見解等がある。実践面では、学習指導要領に示された四つのテーマ、すなわち国際理解、情報、環境、福祉についての学習を取り入れればよいという実践、子どもの興味・関心に迎合し、目標意識的な指導や支援を放棄したような実践、そして総合的な学習と各教科の相互関係や相互関連を考えないような実践等がある。

平成12年度から新学習指導要領の移行期に入り、総合的な学習の本格的な取り組みが始まった。総合的な学習の趣旨についての理解も深まり、その特質を生かした授業づくりやカリキュラムづくりを積極的に推進している学校も多い。しかし、その一方で、総合的な学習の趣旨を歪めて、何とかやらないで済ますことはできないか、簡単に処理しようという思惑も少なからず見受けられる。学校による格差、教師による格差は確かに存在する。しかし、来年度からすべての学校レベル、すべての学校において実施しなければならないという現状認識に立つならば、現時点でのその可能性と問題点を明らかにすることが、今後の理論と実践の発展にとって意義あることと考えた。

総合的な学習は、各教科や道徳および特別活動の時間と同じく、学校カリキュラムの構成要素の一つであり、組織形態の一つである。従って、その計画と構成と支援・指導および評価は、学校のすべての教育活動、隠れたカリキュラムも含むカリキュラムの全体の中で考えられなければならない。

総合的な学習と各教科や各時間との関連を考え、さらに、各教科や各時間同士の関連も見直すことが重要である。そして、学校教育の各構成要素が、相互に補完しあい、相互作用しながら、児童・生徒の全面的な人格発達を達成するのである。

各教科には独自の専門領域があるが、それをさらに深め広げることも重要である。また、総合的な学習における社会的な実践的活動の中で基本的な知識や能力を獲得し発達させることも可能である。

総合的な学習を児童・生徒にとって意味のあるもの、社会にとっての意義あるものにするためには、もちろん、学校における財源の確保、施設や設備の充実、少人数学級の実現、教員の増加、幼・保・小の連携だけでなく、中学校、高校、大学の連携も必要であり、先述で繰り返し述べたように、学校と家庭と地域の連携が不可欠である。また、本小論で扱った実践的な共同研究、さらに歴史的な研究も含め、総合的な学習の理論研究と実践研究を深めなければならない。それとともに、それらの研究成果に基づいて、大学における教員養成プログラムおよび現職教員の訓練プログラムも充実し発展させなければならないであろう。

## 参考文献

- 天野正輝『総合的学習のカリキュラム開発と評価』晃洋書房、2000年
- 木下百合子『「総合的学習」と社会科の相違性と関連性』『教授研究』誌、第18巻第3号
- 佐藤学『カリキュラムの批評』世織書房、1996年
- 無籐隆『学校のリ・デザイン』東洋館出版社、2001年

(本小論はⅠ、Ⅵを中野真志が、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳを秋吉知久が記述した。Ⅴは共同執筆である。)